混合交通を観察する
DOCUMENT Eye
●series—205

●交差点を左折するドライバーの安全確認状況を観察する

左折時に顔を動かして安全確認を行っていたドライバー214人中118人（55・1%）

●観察場所／東京都新宿区「新宿2丁目交差点」付近
●観察日／2月15日（木曜日）
●天候／晴れ
●観察時間／16:50 ～17:50
●観察者／4名

●WHY 左折時にドライバーは安全確認を行っているか？

交差点は事故の多発地帯である。平成18年は、交差点内における人対車両の死亡事故件数が前年に比べ増加しており、信号機ありの交差点でも同様に増えている。

大きな交差点では歩行者用の信号機も設置されている場合が多く、歩行者は安全に道路を横断できるはずだが、ドライバーが接近する歩行者や自転車の存在に気づかず、事故につながる場合がある。

信号機のある交差点で、左折時のドライバーの安全確認状況（顔を動かして左右の安全を確認しているか）を観察した。

大型車のドライバーは大きく顔を動かして左右の安全状況を確認していた

●●WATCHING 前車の様子ばかり気にして歩行者を見ないドライバー

観察場所は、東京都新宿区新宿二丁目付近の信号機のある大きな交差点。横断歩道には歩行者用信号機が設けられている。駅周辺の道路は終日混雑しており、通勤や買い物などでこの交差点を通行する歩行者も多い。

観察の結果、交差点左折時に顔を動かして安全確認をしていたドライバーは214人中118人（55・1%）。乗用車113人中58人（51・3%）、商用車（タクシー含む）93人中52人（55・9%）、大型車8人中8人（100・0%）だった。

内輪差の関係で死角が多く存在する大型車のドライバーは、観察した8人全員が確認を行なっていた。中には上体を大きく動かして積極的に周囲の状況を確認しているドライバーも観察された。

一方で、乗用車や商用車のドライバーの中には、歩行者が横断している間に携帯電話で通話やメールなどの操作をしていて歩行者を見ていないドライバーや、前方しか見ていないドライバーも見られた。

観察した交差点は歩行者が多く、歩行者用の信号が赤に変わるまで、クルマは歩行者の手前で一時停止をして、歩行者が途切れたところを見計らって発進するという例が多かった。そのため、前車が発進するとつられて進む後続車も多く、中には前車の様子ばかりを意識していて、周囲の安全確認をしていないと思われるドライバーも目立った。後続車の中には、交差点を徐行せずに左折したクルマも観察された。

歩行者や自転車利用者の中には、歩行者用の青信号が点滅してから、あるいは赤になってから交差点を駆け抜ける人も見られた。また、横断歩道や自転車横断帯からはみ出して横断したり、左折しようとしているクルマの左側（運転席から死角にあたるスペース）を通行する姿も観察された。

横断歩道の手前で一時停止し、周囲の安全状況を確認するドライバー

歩行者用信号が赤になったため、急いで横断する歩行者

●●●PROPOSE 歩行者や自転車利用者は「見られる」意識を持つことが重要

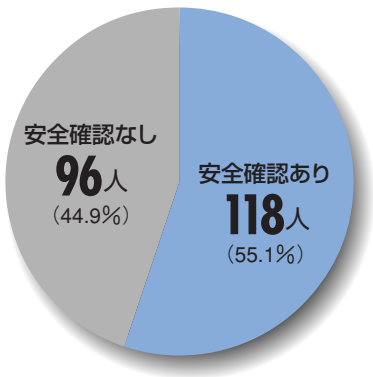
歩行者や自転車利用者の多くは、歩行者用の信号が青の際は、クルマが停止してくれるものと考え交差点を横断している。そのため、交差点を左折するドライバーが不十分な安全確認のままクルマを発進させると、歩行者や自転車を巻き込む事故に繋がってしまう。

また、歩行者の中には子どもや高齢者など、歩行者用信号が青の間に渡りきれない歩行者もいる。歩行者の安全を確保する意味で、ドライバーは周囲の安全確認をより徹底することが大切だ。

ドライバーは、信号が変わりそうな時、つい前車に続いて急いで交差点を左折しようとしてしまいがちだが、クルマや信号ばかりに気をとられるのではなく、落ち着いて、必ず自分自身の目で周囲の状況を確認し、安全運転に努めてほしい。

左折車の左側スペースに自転車が進入

●信号機のある交差点を左折するドライバーの顔を動かしての安全確認状況



（214人中）

	安全確認あり	安全確認なし	合計
乗用車	58（51.3%）	55（48.7%）	113
商用車（タクシー含む）	52（55.9%）	41（44.1%）	93
大型車	8（100%）	0（0%）	8
合　計	118（55.1%）	96（44.9%）	214

★SJ1月号読者プレゼント発送のお知らせ
SJ1月号の読者プレゼントに多数の応募をいただきましてありがとうございました。
厳正なる抽選の結果、6名の方に鈴木亜久里さんサイン入りSJキャップをお送りさせていただきました。

R100 PRINTED WITH SOY INK 本冊子は古紙100%の再生紙に植物インキで印刷しています。